

2020年度 八中1・2年合同全体人権学習 授業記録 2021年3月17日 テーマ「シンジさんとはなちゃんの話から人権について語り合う」

内藤：これから1・2年生合同の人権学習を始めます。1年5組の委員長さん号令をお願いします。

では今日はゲストティーチャーのお二人に来ていただいています。吉成先生それではお願いします。

吉成：今日はお二人のゲストティーチャーに来てもらいました。

1年生も2年生も「日本の人権獲得の歴史」のところで中世・近世、近代と勉強してきたんだと思うんです。それで、今の問題につなげておいてほしいと思って、今日こういう機会をとりました。

二人来ていただいています。自己紹介はまた後でもしてもらいますが、まず一人はシンジという方です。また後で自己紹介をしてもらいます。その次に話をしてもらおうのが、はなちゃん。はなちゃんだけ何で、はな「ちゃん」なんやというところはあるんですが、昔から「はなちゃん」と呼んでますので、はなちゃんです。その二人に10分ずつぐらいお話をしてもらいますので、しっかりと心の眼で聴いてみてください。10分ずつ話をしてもらって、時間変わるかもしれませんが、20分経ったら、みなさんの感想とか、意見交換というか、そういう時間にしたいと思いますので、発表するつもりで、ぜひ聴いてみてください。もうすでに発表するつもりで来てると思うんですけど、感想も含めて発表するつもりでぜひ聴いておいてほしいなと思います。もし何か書き留めたいことがありましたら、聴きながら、見ながら書き留めてください。ペンと紙が手元にあるかと思いますが、それ使って、書きながら、見ながら、聴いてもらえたらと思います。それじゃあシンジさん、お願いしますでしょうか。

シンジ：こんにちは。今日は八万中学校にお招きいただきありがとうございます。僕自身、この4月で40歳になるんですけど、もう中学

校時代の話といえども25年前になります。ここにお招きいただいたきっかけとして吉成先生がおられるんですけど、中学校の時に僕たちの先生でおられたってことです。

僕から言わせてもらう内容っていうのは、自分の経験したリアルな話。今で言うガチな話ってやつですね。それをみなさんに伝えたらと思います。

まずみんな、同和問題、部落差別については学校でちょっと習ってくれてる、感じってもらってる部分があると思うんですけど。そのなかで僕が経験してきた同和問題っていうことについてですが、まず話をする前に、みなさんは中学校の1年生、2年生っていうことなんですけど。みなさんだけじゃなくて、ここにおられる先生にも、ヒントになればというか、ちょっと心に刻んでほしいなっていう部分があったりするんで、聴いてもらえたらと思います。

僕自身は中学校1年生の時、小学校の時は道徳っていう授業ですね。道徳っていう授業のなかで、実際に部落問題とはどういうものなのかっていうことに気づくことはありませんでした。中学校に入って、当時学習会っていうところがあって、塾みたいなのなんですけど、そこに通う子は部落の子であるっていう認識のなか、ボクは気づいていくわけなんですけど。気づいたときはどうだったかっていうことについてはたいした問題ではないんですけど、今みなさんがこうやって体育館でおられるように、ボクたちが中学校のときも、全体学習っていうって、まあ一緒のようなものなんですけど、みんなが意見を言い合う。誰かが言ったことに対して何かを返すみたいな、そういうやりとりがずっとありました。そのなかで、ボクは部落出身なんです。部落出身の人を初めて目の当たりにしたみたいな感じでおられる方もおるかも分かんないんですけど、これは結構ゴロゴロおられると思います。ただボクはこうやって自分で、自分は部落出身ですっていうことで話させてもらっていま

す。これまで生きてきたなかで苦労したこととかもあるんですけど、それは後々話するといたしまして。

中学校時代のときってというのは、当時ボクみたいに、部落出身ですって言う友達も何人かいました。学校の先生からも、同和教育として熱心に指導をしていただきました。その時の同和教育のスタイルってというのは、みんなが意見を言うだけじゃなくて、先生も自分のことを、ワガコトのように話してくれました。ときには涙しながら話してくれる先生もいました。私が今までこうやって授業していくなかで、自分自身が差別しとったことに気づいてなかったって先生もやっぱりいました。だから先生だからといってすごいわけではないし、この問題に対してはね。知らん先生もおおと思います。みんなも当然、最近勉強していくなかで気づいたこともあると思うんで、これからしっかり勉強してって、間違っただ知識をつけないで、これからみんなのペースで闘っていったらいいんじゃないかなって思います。

当時ボク、タクヤという友達がありました。同級生です。親友です。中学校に入って初めて出会った友達なんです。このなかにもそれぞれ、顔がパッと思い浮かぶと思うんですけど、友達のことを思い浮かべてください。ボクその親友がいて、その子の家に一本の電話がかかってきました。これはリアルな話です。「お宅の家って部落なん？同和なん？」って。誰も知らん相手からですよ。今だったら携帯電話があるんで、あれかも知らんですけど、当時だったら固定電話なんで、固定電話に、「あんたの家、部落なん？」という電話がかかってきました。その子一人です。ボクの友達は一人で家にいました。その時に、どうしていいんか分からんようになってしまいました。すぐにボクのところに電話かけてきたんですけど。そのことは絶対にお父さんお母さんに言った方がいいって、これは中学校1年生だったんですけど、そういうやりとりをしました。それは今でもよく覚えてます。何でそういうことを、会話が交わされたかっていえば、やっぱりこういうふうにみんなが集まっているような環境があったので、その場で、やっぱり

自分のしんたい部分であるとか、言いたくないなとかっていう部分を吐き出す。発表して言うっていうことで、自分に自信がついてきたというか、こいつは絶対守る、この友達は大事にする。この友達が好きとか、例えばこの女の子が好き、男の子が好き、彼氏、彼女が好き。先生に至っては、子どもが好き、奥さんが好きとか、旦那さんが好きとか、好きの形はいろいろあると思うんですけど、本気で関わっていくっていうことを、中学校1年生のときに、すごくさせてくれたのが、この部落差別、同和問題、人権学習でした。

そういう経験をもとに、同和問題、部落差別ってというのがリアルにあるんやなっていう経験をもとにずっと生きてきたわけなんですけど。やっぱり発表していくなかで、みなさん、ちょこっとこの前、映像を見させていただきました。授業風景っていうのかな、全体学習の風景を見させてもらったんですけど。僕もたまに手を挙げて発表してました。そのときに、みんなで発表するときやっぱり本音かな、どうなんかなっていう部分があったりしたんですね。当時ね。誰かが言ったからこの子に続きたいっていう感覚もあったし、でもホンマにこれ自分の意見なんかなっていう部分も正直あったりして。中学校3年生くらいの時かな、さっきも出てきたタクヤくんという子。いつもタクヤにつながってきた部分もあったんですけど。タクヤにつながらなかったときってというのがあって。もう泣きながらね、タクヤごめんよって言って。今日はつながることができんかったって言って。そしたらタクヤが、そんなんじゃないよって。無理して意見が一緒になるのもおかしいし。その時の自分のコンディションにもよるし、自分の考えにまだ気づいてない部分もあるかもしれんし。その時の自分の気持ちそのままに生きていくっていう感覚で。何か固い中学生やなと思われるかも分かんないんですけど。そういう感じでお互いの気持ちを大切に生きてきた関係でした。

今もう社会人ですね。社会人になってもう10、20年くらいになったかな。なっとんですけども、そのなかでも一つ、会社勤めの中でも部落差別に突き当たります。お前の、まあみんな

なペンとか持ってるやん。ゴメン、やんとかいう変な言葉遣いになったけど。これがいつものボクなんでゴメンなさいね。筆箱とかね、そういうのあるでしょ。そういうのが会社にもあるんですね。あるんやけど、その箱に、「〇〇〇(賤称語)はこの箱に触るな」っていうごっつい生々しい言葉。〇〇〇っていう言葉は習ってないんかどうかわからんですけど。士・農・工・商・〇〇・非人という言葉があって。〇〇っていうところに小さい「ッ」が入られるような、かなりインパクトのある、強烈な差別用語なんですけども。「〇〇〇はこの箱に触るな」って、ボクが使ってる箱ですよ。それに書かれてました。やっぱり悔しかったですね。義務教育とか、高校生になってからとか、大学生とかと違って、やっぱり自分も家庭があるもんですから、その職場の中でずっと働いて、お金もらって、生活をしていかなアカンわけですね。そういうのに遭ったときに、やっぱり衝撃でした。この会社で続けていけるんだろうかみたいな部分もあったんですけど、そういう差別に直面したときに、やっぱり中学校で学んだ同和問題、人権学習っていうのがすごい糧になりました。やっぱりタクヤっていう友達とつながれた。先生達ともいっぱいつながれたっていう自信もあったんで、その時、その書いた子に対して、自分の口から説明できました。これはおかしいことやでって。深い話までしてもたぶん分かんと思うんですけども、その子に対してね。分かんと思うんですけども、話をさせてもらいました。ゴメンよみたいなこともあったかなかったか、たぶんなかったと思うんですけど。まあその箱は撤去してっていう感じになりました。でもそのときの、その子に言った関係性っていうのは、そんなに元々は仲良くなかったんで。やっぱりアカンよって言われたら、うん分かったって。裏の心を読みとったら、じゃあお前の前では言わんとくわなっていうような感じの内容ですね。ホンマの友達じゃないって言ったら言い方おかしいですけど、やっぱり仕事だけのつきあいだったんで、なかなか響かないんですね。なので、ボクはその腕箱を持ち帰って、自分の家に持ち帰って、自分の友達とも話した

し、先生たちとも話をするきっかけをもらって話をして、こういう事実がありました。やっぱり差別ってあるんやな。けどどうこう向き合い方していかなあかんっていうふうなを、すごい考えさせられた時期もあります。それがちょうど、20何歳だろ。20前半ぐらいだったですかね。

そんななかで、なかなか今って分かりにくくなってると思うんですね。部落差別があるかどうかっていうこと。ないことになっとう部分もあるかもしれんけど、こうやってみんなが、せつかく八万中学校で、みんなと1年生2年生がおって、この教材に目を向けられたっていうことで変わるの、部落差別がいけないとか、差別はいけないとか、そんなんはもう当たり前なんよね。当たり前なんやけど、いかにその問題に対して真剣に考えて、隣におる友達を助けてあげられるか。ちゃんと目を見て話できるかっていうのが、すごいボク重要になってくると思うんです。なので、日常のたわいもない会話することもあるかもしれんし、LINEでのやりとりもあるかもしれんし、いろんな様々な、今だったらSNSとかも流行って、いろんなツールができて、いろんなコミュニケーションの取り方もあると思うんですけど、自分が知らないうちに誰かを傷つけてしまっているっていう部分もあったりもするんで、気をつけながら生きるとかそういう感覚じゃないんですけど、とにかく日々の生活、ライフスタイル、学校での授業とか、休憩時間の友達との遊び方とか、いけないものを見たらアカンて言うとか。助けてあげたいものがあれば助けてあげるとか。そういう感覚ですね。ていうのを、率直に養っていけるのが人権問題であると思うんで。このまま、ちょっとボク、タイマー10分という話だっ。見てたんですけど。今まだ押せてなかったんで、ゼロのままなんで、何分経ったかわかってないんですけど(笑)。また後でもちょっと話させてもらいます。

とりあえずみんなの時間でいうのを大事にしたいので、今ボクが経験したっていう部落差別の実態っていうのを、報告までにみなさんにさせてもらいました。すみません、まずはありがとうございました。

吉成：はい、ありがとうございました。12分。優秀な方です。12分。オッケーオッケー。あることをないことにはできない、ですよね。と思いませんか？あることをナシにはできないと思いませんか？あるんだから。あるのはあるんだと思うんですよ。あるっていうことはね。それをないことにはできないと思うんですね。そんなシンジさんの体験談を、みなさんに聞いてもらいました。

このあと、大丈夫ですか？はなちゃん大丈夫ですか？代わりましてはなちゃんから話をしてもらおうと思いますので、簡単な自己紹介から話をしてみてください。はい、お願いします。

はなちゃん：はい、はなちゃんと申します。吉成先生とは中学生集会のときに来てて、私のお姉ちゃんが中学生集会で実行委員しよったっけ。(うん)実行委員しよったりで、お世話になってたみたいで、「あっ、妹」って言われて、そこからちょっと仲良くなりました。前に来てしゃべるのは慣れてないんですけど、慣れてないんで話がグダグダになると思うんですけど、そこは助けてもらいます。

私は前提として、同和地区の人間です。小学校の時に学習会っていうのに行ってたんですけど、小学校1年生だったので、言われてもちんぷんかんぷんだって。学習会でも学校の先生が来てくれて、勉強することっていったら宿題だったんです。学校の。宿題をずっとしてきて、小学校1年の終わりか半ばぐらいに学習会っていうのがなくなって、そこからふれあい教室っていうのを地区でするようになりました。そのふれあい教室では、障がいをもった方や、差別を受けた方がお話をしに来てくれて、そこでまたそういうことに関して勉強をするっていう場でした。なんで私が参加しよったかって言ったら、自分が同和地区の人間だから参加しよったじゃなくって、ふれあい教室に行くと、学校まで私、家から2キロ半あったんですけど、歩いて行きよったんですよ、行き帰り。それがふれあい教室に行くことによって、バスの迎えが来よったんで、それに乗って帰ったかって、

それに参加してました。参加していくうちに、だんだん知識もついてきますし、対応力。自分がもしそういうものに遭ったときの対応力っていうのも身につけていったと思います。でも、まだどっか実感がなくて、そのまま中学校に上がって、育友会っていうのに参加するようになりました。それもなんで参加したかって言ったら、お菓子が出るとか、おにぎりが出るとか、そういうのを聞いたんで参加するようになって、もちろんお姉ちゃんもそういうのに参加してたんで、お姉ちゃんにも行きなよって言われて参加してたのもあって、自分からなかなか進んでっていうものはありませんでした。

初めて中学生集会っていうものに参加して、みんなでマイクを持って、参加した子は分かると思うけど、みんなで手を挙げて自分の意見を話すなかで、「あっ、こういう意見みんなもとんやな」って、真剣に取り組んでる人がこの中にはおるんやなっていうのを実感して。それで中学校3年の時に、成り行きで実行委員長になりました。実行委員長になってみると、中1中2の時に、過去の学んできたことがあって、発言したいなと思ってても発言できんこともあったんで、実行委員長になったからこそこには言わないかんなど。マイクって手を挙げたらすぐにくれるけん、そこから10分くらい離さんかったりっていうこともあったけんですけど。その時に初めて自分の意見っていうのははっきりその場で言うようになりました。そのなかでも、自分が同和地区じゃって言うてきてたんですけど、やっぱり実感っていうのはそこでもまだなくて。

高校生集会、中高生集会か、中高生集会にも参加してたんですけど、そこで、中高生集会の中で、いろんな人が集まって、いろんな先生も集まってくる中で、やっぱり聞いて「ん？」て思う言葉っていうのも多々出てくるのがあって。その時に何回か、中学生集会で知り合った友達がおるんですけど、その子も同和地区出身で、帰りながら、泣きながら帰って。なんでそこまで言われなにかのだろうなっていう感じで、気持ちがありました。差別を受けたわけじゃないけど、なんでそんな言葉を言われなにかのかなっていう、

ちょっと悔しい気持ちってというのが、その時点で出てくるようになりました。

中高生集会も終わって社会人になって、こうやって前でみんなに話をしていったんですけど、19の時に初めて直接的ではないけど間接的な差別に遭ったのが恋愛差別でした。結婚差別でした。当時つきあってた男の人がいて、その親、お母さんから、つきあうんはいけど、結婚して身内に入るのはダメっていうふうに言われました。その時に、つらいなっていう感じはなくて、今まで勉強してきたことがあったから、対応力がその場についてたから、なんで？ってお母さんに訊きたいって思ったのが本音です。

その後、仲良くしてる友達がいる、その友達の親からも、親が旦那さんと結婚するときに、その旦那さんの出身地を調べに調べ尽くして、そういう地区じゃない人と結婚したっていうのを聞いて、「えっ、私同和地区じゃよ」ってポロって言うたときに、友達は、たぶん詳しい話を知らん友達だったけん、「あっ、そうなんじゃ」だけで終わったんですけど、私からしたら、じゃあお母さんに、私が同和地区の友達、その子が同和地区の友達と遊びよるっていうのを聞いたら、何か言われるんかなって、今でもちょっとドキドキしてます。そこまでこなかったら自分は、差別っていうものに遭うことがなくて。そこでやっと実感できたことだったのよね。勉強して良かったっていうのも、そこであらためて思ったことだったんで、今もみんなには、受けた子もおるんかもしれんけど、でもなかなか実感が無いと思うんです。

中学生集会に行きよる子もおるって聞いたんですけど。自分からなかなか進んでって行きにくいというか、私の周りの子たちは興味がなかった子が多かったんで、行こうって言っても、「えっ、眠たい」とか、「面倒くさい」って言う子が多かったんで、まあそんなかなって思ってます。でも、大きくなって社会に出たときとか、一番近くて、高校生になったときに、いろんな学校から集まって環境が変わったときに、差別だけじゃなくてイジメっていうのも起こりうるかもしれない。そのときに、何がダメで何が正しいかっていうこ

とを、今のうちにしっかりと学んで、それにどう対応していくかっていう対応力をみんなにつけてほしいなと思います。助け船(笑)。

吉成：助け船か。知り、学んで、つけておくこと。対応力をつけておくこと。つけておいてほしいな。無関心な人が多く見られたって、そういうことかな。人権に。人権に無関心な人が多く見受けられるようになったって、そういうことかな。

はなちゃん：そういうこと。ほなけん高校に上がったたら、上がる前とかでも、真剣に勉強しとる子っていうのが少なかったし、そういう他人を傷つける言葉とかを平気で使ってくる子が多いやん。ほなけんそういうのを、しっかり、言ったらいかんことなんやなって、言うた、ポロッと出た言葉で相手を傷つけることがあるっていうんを今のうちにしっかり勉強して、高校に上がったときに、高校とか社会に出たときに、そういうのを言っちゃダメっていうんを、しっかり言えるようになってほしいなと思いました。

吉成：はなちゃんは、どうしてそういう力がついたん？

はなちゃん：どうしてそういう力がついた？私は、親の性格もあったと思う。正しいこと、間違っるとることをここで勉強してきた、プラス、私のお母さんが、何か嫌がらせを受けても、「自分でどうにかしな」っていう人だったけん、「ここで負けられん」っていう人だったけん、自分でどないかせないかんのやな、自分の問題やけん自分でどないかせないかんかっていうんもあって、そこからビュンビュンビュンって。

吉成：自分の思い感じたことを後押ししてくれる人だったって、そういうことかな。

はなちゃん：そうそうそう。そういうことです。

吉成：シンジもそういうところってあった？家族のなかで後押ししてくれるっていう。

シンジ：あのね、ボク全体学習で話し合ったこととか、そういうことっていうのはいつも帰って親に話してました。それで部落出身っていう発言もしたとか。結構事細かくも言ったりしたし。タクヤとの差別電話のことも親とも話したりしました。でも親が、部落差別ってこうやで。お前がこういうふうな差別受けるでっていうふうな発言はボクに対しては一回もなく。ていうんは、その話あんまりしたことないんですけど。ただお前すごいなっていうぐらいのものなんです。結局ボクがいろんな取り組みに対して頑張る姿が嬉しかったっていう感覚なんです。スポーツにしてもね。他のことにしてもそうなんですけど。ただずっと見守ってくれよってっていう感覚ですね。まあもう一步踏み込みたいなっていう部分はあるにはあるんですけどね。

吉成：否定は少なくともされてはなかったよね。何て言うかな。今もそうやけど、今中学生が二人を見るまなざし。まなざしって言ったらぼんやりしとって分からんのやけど、まなざしが大事なときってあるやん。分かるかな。まなざしで分かる部分であることない？そのまなざしが冷たいまなざしなのかとか、あたたかい応援してくれるまなざしなんかっていうのは、何か感じるってあると思うのよ。シンジはそれが別に何かしゃべったわけではないけど、お父さんが聞いてくれたっていうそういうときのまなざしっていうのは、そういうまなざしでなかったんかなっていう気がする。否定じゃないっていう。

シンジ：否定じゃない。もう一個付け加えさせてもらったら、ボクは今こうやってお話しさせてもらってますけど、いろんなところでお話しさせてもらう機会がたまにあります。ボクはそのときに親に、こういう話するよって言ったら、「来る？」って言ったら、「行こうか」って言うし、来てくれとったし。批判とかそんなじゃ全然ないです。ひょっとしたら理解力ゼロかも分からんけどね(笑)。

吉成：いやいやいや、お父さんはボクらの前で

は話しよったからね。ボくら教員のの前ではお父さんはよく話してくれた。うん。だから親子関係の中で、何かこう照れくさくってなかなか話できない。どうやっていいんか分からないっていうところが、親の立場になったら分かるのかもしれないし。けど親として子どもを応援したいみたいな。まっとうなことやってるんだからっていう。間違ったことやってないんだから応援したいっていう、そういうところはあつたんじゃないかなっていう気もするよな。

時間が20分過ぎて30分近くになってきましたので、この会は中学生がメインの時間なので、中学生にしっかりとしゃべってもらいたいと思いますから、このあとマイクを中学生に渡したいと思います。そして合間合間にね、二人に登場してもらおう場面もあっていいかなと思いますので、何か訊きたいことがありましたら言ってもらえたらと思いますので、いったん授業者のお二人にマイクを返したいと思います。よろしくお願いします。

オオヤマ：シンジさん、はなさんありがとうございます。そしてこれからの時間もよろしくお願いします。あらためまして2年生の子たちはもしかしたら私たちのことを知らない子もいるかもしれないので。大事なことを忘れていました。自己紹介をしたいと思います。本日の授業者のオオヤマと内藤です。よろしくお願いします。

ではせっかく1年生、2年生が集まっているので、これからの時間、いろんなことを知ったり、それから考えたり、それから相手に伝えたり、それから自分の考えを深めたりする時間になってほしいなと思っています。

お二人が話してくれたことでもいいし、みんなが今まで学んできたこと、中学校でもいいし小学校でもいいけん。学んできたこと。それから1年生はこの前、学級でも話をしたと思いますが、家の人から聞いてきたこととか、話をしたこと。何でも構いません。意見を言ってくれる人はいますか。他いますか。

1年3組(女)：自分と少し違ったところで生まれただけで差別するのはおかしいと思いまし

た。

1年4組(女)：さっきはなさんが、電話がかかってきて差別を受けたっておっしゃったときに、小学校の時に、部落出身だけで結婚するのがダメとか、この人と関わっちゃいけないとか習って、それを思い出して。やっぱりその地区に生まれただけでこの人はダメとか差別するのは良くないし。できれば自分から行動して少なくしていきたいなと思いました。以上です。

内藤：他に意見のある人はどんどん発表してください。

2年6組(男)：八中1年の人権だよりを読んで、信じたいだけではなく、おかしいと思ったことはおかしいと言える関係をつくりたいと思いました。おかしいと思ったことをおかしいと言うことで、その友達との絆がよりいっそう強くなると思ったからです。

2年3組(男)：人権だよりを読んで、丙午の年に生まれた女性は結婚できないという話を、このしおりを見て初めて知りました。こういう言い伝えは大人だけではなく、そういう判断がまだつかない中学生や小学生などの子どもたちの間でも広がってしまったり、尾ひれ葉ひれが着いて差別を受けている人たちが今よりもっと傷ついたりしてしまうのではないかと思います。

1年2組(女)：うちのお父さんの友達が部落の出身だったらしくて、それでお父さんのお父さんに、その友達は部落の出身だから遊んじゃダメだよって言うふうに言われたらしくて。そのときのお父さんはそんなに気にしてなかったらしいんですけど。そういうのがうちのお父さんにもあって、すごいびっくりしたし。それを私が言われたら、ちょっとお父さんに嫌気がさすし、すごい嫌な気持ちになるなと思いました。

1年2組(女)：はなさんが、差別を受けたわけじゃないけど悔しいって言ってるのを聞いて。

私のおばあちゃんが友達と遊びに行くたびに、その子がどこに住んでるのか訊いてたんですけど。差別をするつもりで訊いたんじゃないかもしれないんですけど、なんかすごくモヤモヤする感じがあって。おばあちゃんのことにも別に嫌いなわけじゃないし家族なので、シンジさんが、お互いの気持ちを大切にすることを築けてるのがすごいなと思ったので、私もそんなふうにお互いの気持ちを大切にできる関係をいろんな人と築いていきたいなと思いました。

オオヤマ：他ありますか。

1年4組(女)：私は少し前ですけど、中学生の交流集會に勇氣を出して行くことができました。その時にすごく学ぶことがあったし、はなさんも行ってたと聞いたので、これからまたあるときは行こうと思いました。

矢野：1年6組担任の矢野と言います。今日はいろいろありがとうございました。この間、クラスの方でお家の方と話をしてどんなことが分ったのかなというのを1時間の中で話をしよったんですけど、なかなか1時間の枠の中では時間がたりなくて。最後結論出んままに終わってしまったんですけど、ある子が意見として、昔の流れを勉強していく中で、勉強せんかったらこのままなくなるん違うんかなって言うような話が出てきたんです。それに対してなかなか話す時間がその場でもうなかったんで、生活記録っていう日記みたいなものを書くんですけど、その生活記録の中で子どもがいろいろ考えてきてくれとることを書いてくれてました。今まで子どもにはお題を出したんですけど、今までで一番考えてくれとん違うかなって、6組の子ホンマに思いました。やっぱりたくさん意見の中で勉強することの大切さっていうのも書いてくれとる子がたくさんおったんですが、そのあたりについてまたお話聞かせてもらえたらなって、6組を代表して言わせてもらいます。お願いします。

シンジ：いいですか。座ったままですみません。

今の意見に対して、恐らく吉成先生が言いたいことと、ボクが言いたいことって、たぶん内容が違うと思うんですけど。ボクの場合です。勉強をしなくてもなくなるっていう考えに対して、ごっつい浅はかなことかも分らんのですけど。ずっとみんながふれんかったら、ほらほうかも分らん部分っていうのは、やっぱりあるかもしれんです。これは正直なボクの考えね。でも知ること、自分の、この話をしたら涙ごっつい出るんですけど。あのね、ボクも親の子でしょ。親から生まれてきたでしょ。親、差別されてきましたよ。親の親かな、差別されてきたと思います。やっぱりそれなりにしんどい思いしてきたこともあったかも分らんけどね。やっぱりないことにされるっていうのは寂しいし、気づいてない、もし自分が部落差別っていう問題に対して全然トライできてなかったら、中途半端に勉強しとったらね、やっぱり自分で部落差別をしとったかも分らんのです。自分自身を差別しとったかも分らんのです。正直。

これもまた葛藤なんですけど、自分も娘いますよ。みんなよりも、まだ小学生やけんね、ここ来たときに、やっぱり同じように見える。みんなの顔と、娘が。やっぱりないって言いたいけどね。やっぱりボクとしては娘にも正直に生きていってほしいっていうのがあるしね。やっぱり先生も言ったけど、あることをないことにできんっていうのはそういうことやと思うし、やっぱりある事実っていうのをしっかり突きとめて、やっぱり差別と闘う力、差別に負けない力っていうのをつける必要があると思うんです。みんなも部落差別だけに限らず、いろんな差別、いじめ問題にしてもそうかも分らんけど、やっぱり向き合う力ですよね。逃げんていう。もしよぼくれとる子がおったら手を差しのべてあげてほしいと思うし。

ボクのさっきの意見に対しては、やっぱり勉強して、勉強せんとこのままいった方が楽かもしれんよ。楽かもしれんけど、勉強することによってそれ以上のものが返ってくるっていう自信が、ボクは経験上あるんでね。そういう意味。これはボクにしかない感覚かも分らんけど、どうなんだろうね。分らんのです

けど。先生はまた違う意見かなと思うんで。

吉成：ボクはみんなに、逆に問いたかった。みんなにっていうのは、1・2年生によ。せんかったらなくなるのにつて。こういう学習。学校の先生がするからなくならんのやつて。言よること分かるかな。学校の先生がこういう学習するからな、差別がなくなるんだと。学校でこの学習せんかったら自然になくなっていくのに。学校の先生がするけんなくならんのじゃと。そういう意見ですけど、みなさんどう思います。みんなに訊きたい。誰か答えてくれんかな。頑張って手挙げたままでおつてよ。他にもおらんかな。手挙げとるうちに手挙げてみて。

1年4組(女)：さっきの質問に答える形で。私のお母さんは、吉成先生と同じ考えで。やっぱり勉強するから差別はなくならんけん、いっそのことその学習をしなければいいんじゃないかっていう考えで。私は、私自身はどちらかというところの方に賛成で。しない方がいいんじゃないかみたいな。何て言うんだらうな。勉強しない方がためになるんなら、ためになるっていうか、なくなるんなら、私ももうホントに勉強しない方が、もうなくしちゃえみたいな考えです。

1年2組(男)：ボクは、勉強するからいろんなことが知れて、それにどう対策するか、自分でもしもそんなことされたら考えたりして。だからこそやらないって考える方がいいと思います。

1年2組(女)：私は、勉強はやっぱりした方がいいのかなっていうふうに思いました。勉強をしなかったら、一時期はなくなるかもしれないけど、それでもしかしたら、また違う差別とかかからつながっていく可能性もないとは言いきれないのかなっていうふうに思ったりとか。そういうふうになって。そしたらもう今から一生懸命勉強して、それをなくす。山本さんも言ってた感じの対策とかそういうのをどんどんどんん考えていった方がなくなるのかなっていうふうに思いました。

1年4組(女)：その話が出たときに、一瞬私も、勉強しなかったらなくなるんだったら勉強しない方がいいんじゃないかとも思ったんですが、シンジさんが涙を流しながら、親がされてたことをなかつたことにしたくないって言われたら、それはちゃんと学びたいと思ったし、そういうことをちゃんと学んで、ちゃんとした解決方法を学んでおかないと、また同じことを繰り返して、同じようなことをされて苦しむ人が出てくると思うので、ちゃんと学ばないといけないのかなと思いました。

1年2組(女)：ちょっと違うかもしれないんですけど、小学校の時に戦争について習ったときに、2度と同じ過ちを繰り返さないように学習するって先生がおっしゃってたんですけど、それはこの差別の学習についても通じるところがあるかなって思います。まず、昔のこととか、他の人がされてきたことを知って、それから考えるのが人権学習で一番大事なんじゃないかなと私は思いました。

河見：ボクは差別、人権学習をしてもしなくても、差別ってなくならんのかなって思います。差別とか、誰かをいじめるとか、ほういうことって、ゼロにはできんの違うかなって思います。ほの理由の一つが、自分の発言がふとふり返ったときに、「あっ、でも今の言葉で誰か気にする子おるかもしれんな」って思うことが毎日あるからです。毎日です。授業の後に軽く、いじるじゃないけどな、「お前いけるんか」みたいなっていうことをしたときに、ほなけどほのときホンマにアカンかったら、つらい思いしとうなって。ほれはボクにそういうつもりがなかったも、差別だったりイジメだったりになり得るなって思います。だからゼロにするんてすごい難しいと思う。けど、なんでキミたちにこの学習をしてほしいとボクが思っとるかをしゃべります。なんでかって言ったら、さっきシンジさんが最初の話の時に言ったんやけど、それに対して負けたらアカンけんて思います。自分がされたとき。自分の大切な人、友達がされたときに、ほこで負けたらいかんと思うんよ。例えばボクが

言ってしまったことで誰かが傷ついてしまったときに、すぐ隣におる友達が、「いや先生、今の違うことない？」って言えるようになるためには、勉強せんかったらできんと思うんよ。先生が言よるけんしゃあないなになると思うんよ。けどそれはボクは優しい世界ではないなと思うので、優しい世界に近づくには、みんながほういうことを考えたら、いじめ側ではなくならんでも、差別がなくならんでも、いじめられたとき差別されたときに、助け合える力は養えんかなってというのが、ボクがいつもこういう人権の授業、日ごろもそうですけど、授業するときに思っていることです。

2年3組(女)：今の河見先生の話に大変賛同してて、たぶん一生かかっても、たぶん人類が人類である時点で、極論差別とかイジメとかってなくならないと思うんですよ。機械じゃないので。でも助け合える力だったりとか、傷つけたときにゴメンなさいと言える力だったりとか、そういうものって、たぶん一人一人が成長していく過程で自分の中から生みだせるっていうか、元々なかったもどンドン自分が意識を変えることでたぶん作れると思うので、絶対にイジメは一生なくならないかもしれないし、差別もなくならないかもしれない。新しい差別も生まれるかもしれないし、どンドン標的を変えて人をイジめる子だっていると思うけど、そういうのを当たり前と思わずに、自分がみんな一人一人、変わっていくとする意識がすごい大事だなと思いました。

オオヤマ：他に意見を言ってくれる子はいいますか。

2年1組(女)：私はやっぱり差別の勉強はしなかったら、違うと思う人もいると思うけど、差別とかイジメとかの学習もしてきたけど、それが悪いことだと思えん人がいるんじゃないかと思って。ほれだったら別に、悪いことじゃないんやからやっていいんじゃないかって考えて、私だったら差別とかやってしまうと思うので、やっぱり差別の学習とかせんか

ったらどんどん増えていくばかりだと思いました。

1年5組(女)：私は吉成先生の問いに対して、差別について学習しなければいけないと思います。他の人たちが言っていたように、学習せんかったらなくなるかもしれないと思ったけど、差別をなくしたいというたさんの人の思いも消えてしまうのはつらいと思ったからです。

2年2組(女)：吉成先生の問いについてなんですけど、今迷っている状況で。理由は人権を習っても差別はすぐにはなくならないと思うし、逆に習わなかったとしてもどんどん膨れていってしまうと思うからです

1年6組(男)：ボクは人権を習っても習わなかったら同じなら、人権を習わない方がいいんじゃないかなと思いました。

1年 組(男)：ボクは人権学習をしなかったとしても、周りがそういうことを言って知るから、いけないっていうことを教えた方がいいと思います。

2年5組(男)：ボクは勉強した方がいいと思います。理由は差別された人たちの気持ちを考えて、それを自分たちで変えていくことが人権学習だと思います。

2年4組(男)：ボクは差別はなくならないからこそ勉強をし続ける必要があると思いました。

2年3組(男)：今、勉強しなかったらなくなるっていう人の意見があったと思うんですけど、勉強しなかったら、学校の先生から本当のことを聞かなかつたら、親が部落差別をしている側だったら、その子どもたちってたぶん差別すると思うんですよ。でも学校の先生とかが、これはダメだって教えることで、その息子の世代は、そのダメだっていう気持ちが芽生えてくると思うんですよ。だからボクは勉強した方がいいと思いました。

1年1組(男)：ボクは人権学習は勉強した方がいいと思いました。理由は、勉強しなかったら、昔の人が、部落差別を受けていた人が報われないような気がしたからです。

1年1組(男)：自分は学習をしてもせんでも、たぶん完璧にはなくならんと思うんで、別に自分はなくなんのだったら、した方がいいと思いました。した方がちょっとは減ると思うし、せんかったら次の時とかにも、子どもとかにも言えるし、そういう考えをもつことによって子どもとかが、それはアカンなとか思うと思うんで、ちゃんと勉強した方がいいなと思いました。

2年3組(男)：差別がどっちみちなくならないにしても、勉強はする必要があると思います。しなかったらなくなるのではなくて、されていたことの記憶がなくなるだけであって、されていた事実はなくならないで、それで勉強したら、正しい知識も得ることができるし、勉強しなかったとしても今コロナに罹った人のことをいじめたりするのと同じように、いろんなことに広がって、差別はなくならないと思うので、正しい知識を得るために勉強はすると思います。

2年6組(男)：ボクは差別はなくならないと思います。でも差別をなくせるのは一人一人がなくす努力をしないとイケないと思うし、人のことを何も思わない人などが変わらない限りなくならないと思います。だから勉強すべきだと思います。

2年2組(女)：私は部落差別は勉強すればなくなると思います。理由は、部落差別は見た目とかで差がないものだから、ずっとなくなっていくと思います。勉強することで、私たちのおばあちゃん世代とかは差別したりするけど、お母さん世代とか私たちの世代はどんどんなくなっているんで、ずっと続けることでなくなると思います。

2年1組(男)：ボクは差別の勉強をしても勉強をしなくても差別はなくならないと思います。

人間は優越感に浸った方が楽しいとか思う人もいますし。でも勉強したら、その上に立ってるときよりも下に立ってたときの自分のことを考えたりできると思うので、勉強した方がいいと思いますけど、勉強しても勉強しなくても、差別はなくならないと思います。

2年4組(男)：差別がなくならないのはマイナスの意見ではなくて、差別をなくし続けることが人間の使命だと思います。

2年5組(男)：ボクは人権学習をするべきだと思います。理由は、部落差別があったという過去はあったのだから、変えられないものだから、その過去から学んで現代に生かしていくことが大事だと思うからです。

2年5組(男)：ボクはこの部落差別の授業をなくした方がなくなると思います。部落差別はいけないことだっていうのをこれから教えるためには、こういう授業が大切だと思うんですけど、これからそういう差別をなくすためだったら、正直自分も、こういう部落とか部落差別っていう授業を受けるまで、そういう言葉すら、部落っていう言葉すら知らなかったもので、なくすためだったらこういう授業をなくしてしまった方が、部落とか部落差別とかはなくなると思いました。

2年6組(男)：差別の苦しさを詳しく知るために、差別について勉強した方がいいと思います。

内藤：生徒のみなさんはこの際他に言っておきたい人はいませんか。

2年4組(男)：昨日自分の親に、同和地区出身の人と結婚するんだったら、自分の親にどうしますかって訊いたら、別に自分の親は「気にしてない。好きにしたらいい」って言われました。自分の親は気にしてないけど、他の人だったら気にしたりしてる人もいるので、人権の学習は続けるべきだと思います。

1年1組(女)：私は人権の学習はした方がいいと思います。理由は親の世代から習っていることだからです。でも、1組では、人権学習を親の代からしているのに、どうしてなくならないのか、減らないのかという質問がありました。私はその質問に、人権学習にきちんと取り組んでいなかったり行動に移さないから減らないと思いました。

1年3組(男)：人権学習は勉強しなくちゃいけないと思います。理由は、このような問題はみんなで考えて減らしていかなくてもはいけない問題だと思ったからです。またこの学習をしていないと、昔からずっとしていたからいいという考え方や、みんながしているからいいという考え方になってしまうかもしれないからです。

1年4組(男)：ボクは勉強するべきだと思います。勉強してなかったら、今している部落についての話を学ぶこともできなくなるし、シンジさんやはなさんが今日話したことが、後世に伝わらず、部落差別があったことがなくなってしまうかもしれないからです。

2年6組(男)：ボクは人権学習をした方がいいと思います。人権学習をしないと差別が減るところか増えていくと思うからです。

1年3組(女)：私は人権学習はするべきだと思います。理由は出遭ったときに、正しいか間違ってるかも分からなければどんどん広まっていくと思うからです。少しでも広げずに、減らすために勉強をすべきだと思います。

2年6組(男)：ボクは差別は戦争と同じで絶対忘れてはいけないし、絶対してはいけないと思ったからです。

2年3組(男)：ボクは人権の学習をした方がいいと思います。人権の学習をせんかったら、差別意識とかもどんどん、時が経つにつれ減っていくって思ってる人もいると思うんですけど、今まであって今もずっと続いているこの差別を、なかったものにしてはいけないと

思ったからです。

1年1組(女)：前に先生が考えないようにすればいいんじゃないかみたいな話で、考えてみてって言われて考えたことなんですけど。今回部落だけで他の差別も軽視して、人の苦しみを全然考えないから、差別はなくならんんじゃないかと考えました。なので差別についての学習はした方がいいと思いました。

2年1組(男)：ボクは差別についての学習はするべきだと思います。理由は、いつか差別を目の当たりにしたときに、正しい知識を持ってないと困ると思うからです。

1年3組(男)：ボクは人権について勉強した方がいいと思います。理由は勉強しても差別はなくならんという考え方の人が勉強すると、それだけで今まで人を差別していたり侮辱していた人たちのなかの一部は止めてくれる人がいると思うので、しないよりは減った方がマシなのではないかと思ったからです。

1年6組(男)：ボクは人権学習はするべきだと思います。差別をする人がゼロにはならなくても、いつかゼロになることを信じてするべきだと思います。

1年3組(女)：人権学習の勉強をしなかったら、知らないところで差別を受けてしまって、誰も助けてくれない状況で一人で悩みを抱えてしまうかもしれないので、した方がいいと思います。

2年1組(男)：ボクは勉強してもしなくても変わらないと思います。理由は、噂や迷信を信じ込む人がいるからです。

1年6組(男)：自分は人権学習をした方がいいと思います。なぜかという、人権学習をしていない体で話をしたら、今の時点でイジメとか人種差別とか部落差別とかはほとんどの人がしている状況になると思ったからです。

1年6組(男)：ボクは差別について勉強した方

がいいと思います。差別について勉強してもしなくても、差別がなくならんのであれば、今のうちに勉強しておいて、差別は絶対にしてはダメだということをみんな知っておいた方がいいと思うからです。

2年6組(男)：ボクは勉強した方がいいと思います。なぜなら勉強しなければ、差別がダメだと気づかないからです。

内藤：はい、失礼します。いろいろ人権学習をするべきかどうかとか、部落差別について学習をするべきかどうか。また差別はなくせるのか、どうすればなくせるのか。いろいろホントに意見を出してくれました。みんなと同じでもいいですし、この際別のことでも言っておきたいという人いませんか。

1年2組(男)：さっきシンジさんが、娘にも同じ思いをさせたくないって言ってましたけど、奥さんの方の両親とは、よく言われる、相手の人は部落だから結婚するのはやめなさいみたいなことは言われたのですか。

内藤：今質問出してくれましたので、ここでゲストティーチャーのまずシンジさん、はなさんにも吉成先生にもお話を聞いてみたいと思います。

シンジ：結婚して9年目ぐらいになるんですけども、実際に奥さんと結婚するときに、奥さんのご両親に自分は部落出身ですっていうことを伝えました。事前に奥さんにも伝えてはいたんですけど、その時に奥さんの両親から言われたのは、もうほんなん関係ないしなっていう部分でした。ほなけどじいちゃんばあちゃんには言わん方がいいっていう意見。言わん方がいいかもなっていうような雰囲気でも言われました。うーん、言わん方がいいんかなっていうふうな葛藤もあって。里帰りとかするときじいちゃんばあちゃんに会ったりしたんですけど、その中でやっぱり熱い話とかもボクたまにしたりするんで、いつもはほういう雰囲気になったら、自分はこういう活動をしよってっていうふうな話を持ってい

くと思うんですけど。もうおじいちゃんとか最近亡くなったんですけど。やっぱり最後まで言えませんでしたね。なんかね、変な差別意識とかもってるっていう感覚もあったし、そういうのを知っているから、親がたぶん「言わん方がいいん違うん」みたいな感じでたぶん言ったと思うし。それだけ昔って、差別意識の塊だったっていう部分もあると思うんです。今の質問に対しては、ボクが言えたんは、やっぱり奥さんと奥さんの両親だけっていう部分になりますかね。

内藤：はい、ありがとうございます。

吉成：私？私？

内藤：ここまでのみんなの話を聞いてであるとか。もしなかったら、他にみなさんから質問とか意見を聞きたいと思うんですけど。

はなちゃん：さっきの、みんなの投げかけた質問に対しての答えをいっぱい聞いてて、人権学習は必要かっていうのは、どの人権学習、中学生集会とかでも、絶対にあがる議題だったんですよね。私が受けてきた中で。その中で一番私が思ってるのは、一番人間の中で怖いのは何かっていうのが、無知であるっていうことなんです。何にも知らないっていうことが、一番怖いなって思っとるところがあって。なぜかって言ったら、私ら子どもって親から何でも一番最初に教わるんですよね。お母さんからあれしなさいこれしなさいって言われたことって、やっぱりみなさん守るよね。親から言われる言葉ってすごい強くて。たぶんみんなのお母さんに聞いたとしても、そういうのって一番最初に誰に聞いたかっていうたら、親の親世代と思うの。おじいちゃんとかおばあちゃんとか。親から言われとる言葉ってやっぱり強いから、そこで何も知らなかったら、そのまま受け入れてしまうと思うのね。その言葉を。てなったら、自分が差別する側に立ってしまうかもしれない。やけんそうならんために、やっぱり自分が差別っていうのをいけないうの、学習しとかないと、いけないうんじゃないかなと私は思っ

ています。部落差別を受けてきた人の中にも、違う差別、例えば男女差別であったりとか、そういう差別っていうのも起こりうるんですよ。実際私の同和地区なかでも、男女差別っていうのもあったりとか、いろんな差別を経て、うちの地区だけでもお寺が2つに分かれとったりもします。昔の差別があって分かれてたりもしたし。自分たちが、言葉は悪いけども、〇〇っていうふうに使われてきてるなかで、女の人だけが穢れてる。言うていいんか分からんけど、生理とかね、そういうので、出産とかもあって、女の人だけが穢れてるっていうんで、その地区の中でも差別っていうのがあるんですよ。部落だけがダメっていうわけじゃないし、例えば外国人の人とかだったら、肌が白い黒い、目の色が違うっていうところでも、人っていうんはちょっとのところで差をつけていくんですよ。そこで差をつけることによって差別っていうのが簡単に生まれてしまうんですよ。そこで何も知らないっていうのが怖いから、私は勉強して、自分がそうしないような知識をつけなければならぬんじゃないかなと思いました。

内藤：すみません、今お二人に話をさせていただきましたが、それを聞いて発表してみたいことや訊いてみたいことがある人はいますか。

1年 組(男)：一番言われて嫌だったことと、言われて一番嬉しかったことは何ですか。

はなちゃん：一番言われて嬉しかったことはおいといて、つらかったことは、この前つい最近言われたんですけど。人権の話をしに行くよって友達に言ったときに、「やっぱりな」って言われたんですよ。私の友達もそう、高校の友達もそうなんですけど、そういう地区の子って、治安が悪いとか口が悪いとかって言われたりするときがあって。私結構口悪いというか、がさつなんで、いろんな言葉をポンポンって言うことがあるんですけど。そのときに話しに行くって言って。「あっ、やっぱりな」って言われて。たぶん相手は何も思っていないんだろうけど、言われた瞬間に、やっぱりなんかそういう感じで見られるんかなみた

いな。その言葉遣いが悪いっていうだけで、あの子は同和地区の子なんやなって見られるんかなって思ったんが、ちょっとウツて、刺さったかなって思います。

嬉しかったことは、仲いい友達とか、結婚するときとかに、みんなには一応同和地区なんじゃないかっていうんも言うようにしてね、結婚するときも言いましたし。そのときに、「関係ないやん」て。こっちは勇気を振り絞って言うんですよね、やっぱり。何か言われたらどうしようとか。私のお姉ちゃんが結婚するとき、おじいちゃんおばあちゃんにそれで反対されとるっていうのを聞いたんで、結婚するときやっぱり言われるんじゃないかな。でも言うとかんかったら、後々気づいたとき、知ったときとかに、その旦那さんにも妹がいたんで、その妹に何か被害がいても嫌やなって思ってたんで、最初のうちに言うところって思って、勇気を振り絞って言ったときに、「いや別にそんな関係ないでえ」って。親戚とかも何もそういうのは言ってこんだろうし、言うてきたとしても、こっちは関係ないって言い切るって、そこまで言ってくれて結婚したっていうのはあったんで、そういうのを言うてくれたっていうのは嬉しかったですかね。

シンジ：ボクはですね、そこまで深い感じではないんですけど、言われて嬉しかったことっていう、この問題の中でですね。通じて思ったのは、パッと出てきたのは、やっぱり中でつながってきた友達と連絡のやりとりとかするとき、LINEにしても電話にしても、最後いつもお互いに「ありがとう」っていう感じの言葉でお互いが締めくくるっていうんが、すごいシンプルですけど、それがすごい嬉しい言葉かなっていう。今日もつながれとったんやなっていう感じもするし。嫌な言葉っていうのは、今すごいモヤモヤしてるのがあって。それは、この同和問題とかの教材を家に置いてるんですけど、本とかね。置いてるんですけど、それを見える部分に置いてるんですけど、それを奥さんの親とかから、「あれもうのけてもいいん違うか」とかね。ボクは子どもに、部落問題のことにつ

いてもうちちょっと大きくなったら説明するつもりでおるんですけどね。今は。おるんですけど、「それもう下げてもいいん違うか」とか。自分からしたら孫なんでね、「もうわざわざそんなん言わんでいいわ」っていうことを言われたりとか。これは今すごい葛藤してます。モヤモヤしてますね。「いや、親父ちょっとほなけどねえ」っていうふうな話まではいくんやけどね。ちょっと今葛藤しとって。嫌だった言葉っていう言い方が正しいかどうかは分らんんですけど、まあ今もちょっと考えている最中です。ボクも今、勉強中です。

オオヤマ：ではもう時間も迫ってきたので、この機会にぜひ発表したいなって思う子、手を挙げて教えてください。(最後です。最後。最後に言っときたい人。)挙げとってよ。

2年5組(男)：さっきの人権問題について、勉強した方がいいか、しない方がいいかっていうのについて、ボクは勉強した方がいいと思います。なぜなら、してなかったら、自分がいつの間にか人を差別しているかもしれないし、自分も差別しているかもしれないということに気づけないからです。

1年4組(女)：お二人の名前の前に、人権教育研究所って書かれてるんですけど、具体的にどういうことをしているのかっていうのを教えていただきたいです。

1年1組(男)：ボクは人権学習をした方がいいか、しない方がいいかで、した方がいいと思います。なぜなら、差別を目の当たりにしたときに、ちゃんと知っていることを注意できないと思ったからです。あと、人には嫌いな人とかがおって、そこで行き過ぎた行動をしてしまうことを人権学習で学べると思ったからです。

1年5組(女)：今回の人権集会でも何回か出た言葉なんですけど、「部落の出身」という言葉を聞くと、何か心が言い表せない気持ちでとてもモヤモヤしました。

吉成：T-over っていうのはね、私が作ったんです。二人が会員1号，2号。T-over って、冗談抜きで私が作ったんですけど、何かっていうとね、今まで人権学習をずっとしてきて、先ほども「こういう学習をするから差別がなくなるんだ」「こういう学習をしなければ自然と差別はなくなっていくのに」「こういう学習をするからいけないんだ」っていう、こういう議論は昔からあったんです。昔からあったんです。「寝た子を起こすな論」っていうんですけどね。寝てる子を起こすからいけないんだっていう。寝とる子は寝とるままにしてたらいいいんだって。そっとしとったらいいいんだ、起こさなければいいんだっていう、そういう議論なんですけど。それに真っ向から対立してきたんですけど、議論をしていく中で、今のみなさんもそうなんですけど、議論をしていく中で、違う意見の双方が、互いに越えていく。意見の違いを越えていくような場面を何度も見たんですよ。授業の中で。今日のような授業の中で。互いの意見の違いを越えてね、交流していくっていう、そういう場面を何度も見たんです。互いに越える、T-over なんです。そのうちね、立場を越えて、共にいろんな逆境を越えていこうっていうふうな仲間関係、そういう仲間関係で、みんなで共に越えていこうっていう、そういう授業になっていったんです。共に越えていく。そのT-over なんです。もう一つ言うと、英語で「Talk over」っていう熟語があります。「Talk over」っていう。これはじっくり話し合うっていう、そういう意味なんです。「Talk over」って。

いろんな意見が出ました、みんな。でも、どれが悪いかっていうことは、誰も言いませんでしたよね。みんな優しいわ。あれが違う、これは悪いて言いませんでしたよね。優しいなと思うんです。違いを認め合うんでしょ。何でもかんでも認め合うわけにはいかんかもしれないですけども、非難しなかったじゃないですか、みんな。批判しなかったじゃないですか。違います？優しいなって思うんですよ。そういうみんなの語り合いを通して、人権学習をしていきませんかっていう、そういう意味を込めて、「T-over」なんです。そういう人

権学習をしていきませんかっていう意味を込めての「T-over」なんです。

みなさんね、人権学習に私がなんでこだわってるかっていうとね、これは簡単なんですよ。難しいことは一つも無い。私が人権学習をする意味。どうして人権学習をするか、簡単です。シンプルです。シンジが好きだからです。はなちゃんが好きだからです。それだけなんです。考えてみてくださいよ、みなさん。25年後に、今ここにいる先生の、何人と連絡を取り合いますか。シンジはもう25年やな。出会って25年になります。25年経った先生と、どれだけ連絡とりますか。とってるかもしれないけどな。人権学習をすることでね、何か気持ちが通じ合えたような気がするんですよ。これははなちゃんも一緒。25年ほどじゃないけどな。一緒なんです。この二人が好きだからするんですよ。だって考えてみてくださいよ、おかしいと思いませんか？シンジが言いましたけど、シンジのお父さんやお母さんやおじいちゃんやおばあちゃん存在が、無いことにされるとかって、あり得んことないですか。みんなだってそう違います？みんなの存在がないものにされたら、嫌なことありません？みんなのお父さんやお母さんの存在が無いことにされたら、嫌なことありません？そんなバカな話ないでしょ。無かったことにしよう。いたのに、いるのに。そんなバカな話ないことないですか。だから学習するんですよ。その学習をすることを通してつながれた感覚があるから、気持ちがいいから、好きだから、するんです。それだけ。人権学習って、人とのつながりを大切にする学習でしょ。人との出会いを大切にする学習でしょ。出会ってつながった、その感覚が気持ちいいから、今でもこうやってつながって、私は人権学習をしたいなって思うんです。簡単なことですよ。なーんも難しくない。ただそれだけ。だからみんなにも、そういう感覚を味わってもらえたらええのになーっていう、ただそれだけです。

水槽の中に泥水があると考えてください、みなさん。考えてください。水槽の中に泥水があります。この泥水を真水にしてください。無色透明の水にしてくださいって言われたら、

みなさんどうですか。できますか。どうやってしますか。どうですか。何かいい方法ありますか。どうですか。何かいい方法思いつく人。(ろ過する)ろ過するか。なるほど、ろ過するか。ろ過したら綺麗になるな。ろ過しよるようなものなんですよ、つまり。ろ過しよるようなものなんです。ろ過したら 100 %綺麗になるだろうか。首ひねったな、今(笑)。ひねったな(笑)。自分で言っというて。ろ過してももしかしたら、まだ残るとるかも分からんよな。けど、前よりは綺麗になったことない?その作業をしよん違います?そう思うんです。そりゃゼロにはできんかも分からん。だって、イジメにあっている子を目の前にして、差別受けている子を目の前にして、イジメはなくなりません、差別はなくなりませんとかって、よう言わんですよ、私は。なくそうって、がんばろうって、一緒になくしていこうって、言うけど、ゼロにはできん。けど、限りなくゼロにはしたいと思う。シンジの涙に応えたい。ただそれだけ。あとはみなさんがどうするか、どう考えるか。ただそれだけやと思います。話ができなくて良かったです。もう次マイク振ってよろしいですか。

はなちゃん：さっきも吉成先生が言ったように、先生との絆って、普通の学校生活ではなかなかできんのですよね。私が今連絡とんよる先生って、やっぱり人権の勉強で学校以外で会った先生たちなんですよ。その先生はどんな先生かっていったら私が中学生集会の講演したときか、聴きに行ったときのどっちかのときに、自分の体験談を言ったときに、「こんないい子が生まれたところだけで差別されるんはホンマに腹立たしい」って。「ホンマに許せんことじゃ」って。そこまで言うてくれる先生がおって。でもその先生とは人権の勉強を一緒にしよったからこそ、そこまで言ってもらえたんだろうなっていうのもあったし、そこで先生との絆っていうのもちゃんと確かめられたっていうのもあるし、その勉強を一緒にすることで、友達との絆も深まったっていうのもあって。

さっき一番最初に話した、中高生集会で泣きながら一緒に帰った友達っていうのも、中学

校1年生の時に全然、まったく違う中学校の子なんですけど。そこで出会って、今は一緒に、ママ友をするぐらい、ずっと仲良しの友達なんですよ。その子には何でも話できるし、人権の勉強も一緒にしてきた子やけん、ホンマにゼロから十まで何でも話ができる友達でもあるんで、こういう勉強することによって、やっぱり人と人とのつながりっていうのが深くなっていって、すごい自分のためになったなって、今になって思う。深く深く思うし。ちょっとまとめるんが苦手なんですよ。(シンジがまとめてくれる)なんで、頑張ってください(笑)。

シンジ：すみません、もう時間も来てしまってるようなんですけど。少しだけ時間ください。さっき、無知な感覚ではダメっていうふうな意見、さっきはなちゃんから話してもらいましたけど。これ一個言おうとしたのがね、先週ですね、みんな学校来ている時間帯なんですけど。朝、某テレビ局でね、差別発言に関する内容っていうのがあって、今週の月曜日に、それをメディアが全面的に謝罪するっていうことがありました。みんなも知ってるメチャクチャ有名なテレビ番組です。それを、結局その差別意識、これはアイヌ民族っていうアイヌ問題なんですけど、ボクも正直そこまで詳しくはありません。それでその部分に対して差別的な発言がありましたっていうのを放送のあとに気づいた。それが発覚するまでに、その発言をした人、編集した人、打ち合わせをした人っていうすべての大人が、差別って知らなかったらしいです。無知なんですよね。全然内容を把握してなくて。結局アイヌ民族の人たちを傷つけてしまう事態になって、番組側が謝罪する、テレビ局側が謝罪するっていうふうな内容の記事、ニュースになってました。その件についてボクも奥さんと、「ホンマに無知って怖いよな」「知らん間に人を傷つけてしまうって怖いよな」っていうふうな話をしたのを、ちょっと思い返して。それをどこかで言いたかったなっていうのが一つ。

また、差別がなくなるとかね、なくなるとか、なくす、なくさんとか、いろいろあると

思うんですけど、結局自分がこれから、ボク中野シンジっていうんですけど、中野シンジが生き生きとして生きていくためには、やっぱり間違っただことは絶対許さんっていう感覚。これ一つですね。ボクの中でのシンプルっていうことは。絶対、自分の中でおかしいと思ったことは絶対おかしいって言い切って、そこでこっちがもしおかしかつたら、そこで徹底的に話し合う。話す。勉強するっていう部分ですね。やっぱり自分自身が生き生きと生きていくために、やっぱりこういう問題に対して、どんどん発言、自分の意見を言っていくっていうのが、やっぱりシンプルな自分の解放のステージやと思います。

最後1点。最初に出てきたタクヤくんと、今日の朝、メッセージのやりとりをさせてもらいました。少し短いので、やりとり聞いてください。ホンマに自慢の親友で、今も友達やっています。ボクが今日の朝 5:30 に LINE しました。こんな時間に失礼します。タクヤは作業してるかな。今日の昼から吉成先生からの声かけで八万中学校の生徒、先生と出会うきっかけをいただきました。自分の経験した部落差別、中学時代に経験した人権学習を柱とした内容になります。日々考えが変わる日常ですが、価値観は動くことなくやっている今日この頃です。先ほど、ボクたちもう一人森口先生っていう方ともおつきあいさせてもらって、その先生が作成した本を読み返してみました。やっぱり要所要所で涙が出ます。差別があるという事実に対してなのか、それを認めての自分に対する悔し涙なのか、娘に対する思いなのか、中学生のエネルギーは底知れぬ、中学生って、みなさんのことね。みなさんのエネルギーは底知れぬものがあると思うので、自信をもって話していきたいと思えます。これ、タクヤに朝の 5 時半に LINE しました。まだ寝とうと思ったんですけどね。すぐに、「おはようございます」返信来ました。朝です。彼は農家なんで、朝が早いんですね。まず最初に、「季節は春ですね。早い朝からしびれるお話聞かせていただきました。ありがとうございます。元気が出ました。日々農業作業、精進しております。」これ難しい農業の言葉書いてるんですけど、これはちょっと置

いときます。「トラクター動かしています。」と、農業の話があって、ここから「私はいかなる場面、いかなる状態にあっても自分らしく生きていきたい。誰もが自身の可能性を追求できる、チャレンジできる社会であってほしい。人生は自分を知る旅。自分の可能性探しの旅。娘やこれからを生きる子どもたちが、安心して暮らせる社会を少しでもサポートできる農家で、おっちゃんの一人でありたい。なるべく笑顔でいられる自分でありたい。早朝より、襟を正し、気合いを入れていただきました。レッツエンジョイ！「自問自答」自分と向き合うっていうことですね。レッツエンジョイ！峠スピリッツ。畑から愛とエールを。自身と社会、みんなに発信します。」っていう言葉をもらいました。これね、普通に友達とやりとりする日常の会話なんです。まだこれ続いとんでね、その最後にいつも「ありがとう」が入るとんですけど。こういうやりとりをしてから来ました。ボクもみんなと会えるの楽しみにしとったし、ボクの友達、農業しよる友達も、朝からボクがみんなと会うっていうことを楽しみにしてくれています。それでたぶん、「どういう意見が出た？」とか、「みんなどういう気持ちでおる？」っていうんを訊かれます。「こうだったよ」っていうふうな話をして、すごい自分の娘に対する気持ちとか、自分を取り巻く環境とかに自分たちを落とし込んでいきます。ボクたちも勉強しています。間違っただことに気づかず、誰かを傷つけてしまうこともあると思います。

河見先生ですかね、さっき先生がおっしゃってたように、日常の中で、「あれ、ちょっとこれ差別かな」って、差別になりかねん部分っていうのが日常にはあると。これはボクもあります。やっぱり、言ったこととかしてしまっただことっていうのは、悪いなって思ったときに、そこでやっぱ一歩踏みとどまって、「あれ、さっきこんなこと言うてしもうたかもしれん。これちょっと悪かった」っていうね、その一言っていうのがね、やっぱり言えるのも、またこれも勇気やと思うし、それで友達同士の関係っていうのも成り立っていく部分もあるかと思うし。やっぱり悪いことを言ってしまった自分が悪いんじゃないし。それに

気づけた自分が大切やと思うんでね、これからおかしいことはおかしいって言えるようなみんなになって行ってほしいし、すでになつとうと思うんですけど、これからの人権学習を精一杯楽しんで、これからどんどん発信して行ってください。今日はありがとうございました。

オオヤマ：ありがとうございました。まだまだ話し合いをしたいところですが、残念ながら時間が来てしまいました。私も教員になってたくさん知ることがあるし、今の人権学習のこの集会を通して、「あっ、なるほどな」って思うことがたくさんありました。ほなけん吉成先生と1年間学年が一緒だって、お話しする機会がたくさんあったんやけど、その時にやっぱり思うのは、学んでいったらたくさん新しい疑問も出てくるし、知らないこともたくさん出てくるなと思います。ほなけんやっぱり私もそうやし、みんなもそうやと思うんやけど、終わりが無い、人権学習って終わりが無いんやなって思います。ほなけん、こうやって学ぶ機会がたくさんあるみんなが羨ましいです。これからも一緒に学んでいきましょう。

いけますか。はい、それでは6組の委員長さん、号令をよろしくお願いします。

(姿勢・礼・「ありがとうございました」)